久安百首名所考

田尻嘉信

一

「久安六年御百首」、久安百首と通称されるこの百首は、諸本表題の註記に「是第二度也、初度者題同堀川百首」とあるように、崇徳院の第二度百首である。初度は教長、行宗の家集に一端をうかがわれる堀河百首題百首で、永治元年十月（一一四一）以前に詠進があったようである。先蹤とされた堀河百首は組題百首の嚆矢で、生活的抒情から文学的世界への開眼に新風を示した。崇徳院初度百首は、この堀河百首の意図と方向とを継承する院の姿勢が察せられるが、久安百首もまたその延長上にあったと思われる。

久安百首は新院となって程なく康治二年（一一四三）、新たに撰題、詠進を命ぜられたものである。この百首の成立にともなう流動の経緯は、流布本の俊成・定家二様の奥書、正治奏状・長秋詠藻などに記されている。それらを検討、経年の錯誤を正して、全容を仔細にされたのは井上宗雄・谷山茂両氏(1)(2)である。谷山茂氏は、氏の蔵される稀少な最終形態本である「百首和歌集」の翻刻紹介もされている(3)。さらに久保田淳(4)、松野陽一(5)両氏が、精細な知見を加えられている。

久安百首の成立過程については、これら先学に負うところがきわめて大きい。それによれば当初、百首は公能・公行・行宗・教長・顕輔・新隆・忠盛・俊成・覚雅・堀河・兵衛・安芸・小大進に詠進が命ぜられた。これに主宰者の崇徳院が加わる一四名の構成で、堀河百首の先故に倣ったものである。その後、行宗・覚雅・公行が順次歿し、季通・清輔・実清が加えられ、久安六年（一一五〇）に奏覧された。仰せにより俊成が、それを部類して奏覧したのは仁平二年（一一五二）である。翌年さらに忠盛の死によって詠進歌を除き、隆季の追進歌を部類に切入れ、俊成が再部類を完了したのは仁平元年暮秋と記されている。この最終的な再部類本は、保元の乱などの事情から再び奏覧されることはなかったのである。

定家は、家隆の俊成自筆転写本を借りて書写校合している。それを明らかにする流布本奥書は、もと俊成自筆本を祖本とする部類本に載っていたと解される。しかし、その奥書の末の「于時貞和二年十一月十七日抄出、自余作者等追可書之而已」の記載から、部類本は流布しなかったようである。家集類から久安百首歌を抄出集成したことがわかる。それが類従本系の諸本にみられる非部類集成本である。現存部類本は隆季歌

を含むので再部類本である。それは、同じく隆季を含む非部類本を資料としたことが推測されている。現存本はともに後代の伝写で、歌句歌序の異同、歌の出入りがあるのは事実であるが、ともに百首成立の過程の一形態を示したものである。ここでは便宜、通行の類従本に従って、久安百首にあらわれた名所の大要を明らかにしてみたい。

類従本は、季通・清輔・実清・隆季を含む作者一四名で、題は春廿首夏十首　秋廿首　冬十首　恋廿首　神祇二首　慶賀二首　釈教五首　無常二首　離別一首　羇旅五首　物名二首　短歌一首の構成となっている。実際の本文上は、公能一首（恋）季通一首（春）堀河二首（春冬）安芸二首（春釈教）を欠き、顕広一首（恋）が加わっている。次にあげる名所一覧は類従本の歌序に従い、個々の名所を名所・所在国名・題・作者の順に記した。初出名所は頭初に●印、一首に二ヶ所以上の名所がある場合は△印をつけ、千載入集歌は歌番号とともにそれを示した。さらに下欄には能因歌枕・和歌初学抄・八雲御抄に、その名所の所在を確認し、異同のある場合など必要によって夫木抄・歌枕名寄を検索して証歌を示した。能初八夫名はその略号である。猶、唐国・敷島・津の国・陸奥など総称的な国名、国郡制の国名は除いた。五月山・早瀬川・涙川・また東路・越路など普通の歌詞とみられるものも採らなかった。これら諸点は堀河百首に触れた際と同様の基準である(6)。名所の認定はかなり微妙な面があるが、作歌表現に活かされた歌詞としての点を注目したい。

二　久安百首名所一覧

青根が峯（大和）	冬	実清	△八（大和）	夫（大和又常陸、宝治二年百首後嵯峨院）名（大和、万葉一一二〇）
明石　（播磨）	旅	実清	能初（播磨、明石浦）	八（播磨、明石浦・明石潟）
明石の瀬（播磨）	旅	清輔		
戸				
安積の沼（陸奥）	夏	安芸	初八（陸奥）	夫（陸奥、最勝四天王院名所御障子後鳥羽院）
浅香山　（陸奥）	秋	季通	八（陸奥、安積山）	夫（陸奥、万葉集一五五一市原王）名（陸奥、安積山、万葉集三八〇／伊勢、朝香山、万葉集一五五一）
朝倉　（筑前）	春	公能	能初八ナシ	夫（国名欠、久安百首親隆）名（筑前、木丸殿、新古今一六八七天智）
	夏	親隆		
	冬	堀河		
朝日の山（山城）	冬	顕輔	初八（山城）	
●あさふりの橋（末勘）	秋	公能	能初八夫名ナシ	
浅間の野（信濃）	恋	清輔	能（信濃、浅間嶽）（千載八五七ロ）八（同／国名欠、あさは、あさまと野路と云へり、かるかや、すげ。千載二句、浅間の野路）	

朝の野　（大和）　旅　季通　能初夫ナシ
名（大和、正治百首経家）

朝の原　（大和）　春　顕輔　能八（大和）

芦の屋の（こや）（摂津）　春　堀河　能初八夫名ナシ
能八夫名（摂津、芦屋里）

●芦屋の沖（摂津）　旅　顕広　能初八夫ナシ
名（摂津、久安百首・新勅撰五二〇俊成）
八（摂津、芦屋浦）

飛鳥川　（大和）　春　実清　能初八（大和）

化野　（山城）　秋　公能　能（河内）
八（只あだなることによせて云へる也云々）

秋　清輔　名（大和、阿太師野、委見于八雲御抄）

安達野　（陸奥）　秋　親隆　能初八ナシ
夫（陸奥、建保三年名所百首忠定）
名（陸奥、林下集一六）
八（陸奥、安達原）

阿太の大野（大和）　秋　実清　八（大和）
夫（大和、久安百首実清）
名（大和、万葉二〇九六）

穴師川　（大和）　冬　実清　八（大和）
夫（大和、堀河院御時百首仲実）
名（大和、万葉一一〇〇人丸）

穴師川　（大和）　冬　季通　八（大和）
名（大和、古今一〇七六）

阿武隈川（陸奥）　恋　崇徳　能初八（陸奥）

短　顕広

あまのかご山（大和）　夏　隆季　初八（大和）

夏　親隆

嵐の山　（山城）　春　崇徳　能八（山城）

短　清輔△

嵐山　（山城）　短　安芸△能八（山城、嵐ノ山）

秋　小大進

有乳の山（越前）　冬　親隆　初（越前）
八（越前、有乳山）

有馬のいでゆ（摂津）　恋　安芸　初（摂津、有馬の御湯）
八（摂津）

●有馬の村（紀伊）　春　公能　能初八名ナシ
夫（摂津又紀伊、久安百首公能）

有馬山　（摂津）　恋　堀河　初八（摂津）

阿波の鳴戸（阿波）　恋　教長　能初八名ナシ
夫（阿波、秋日詣住吉社詠百首和謌・拾玉集一五二二）

生野　（丹波）　旅　顕輔　八（丹波）
夫（丹波、久安百首安芸）

秋　安芸　名（丹波、続古今九二八公経）

生駒山　（大和）　秋　親隆　能（大和）初（河内）
八（大和、通河内国両国名所歌）

伊勢　（伊勢）　神　季通　八（伊勢、五十鈴宮）
夫（伊勢、伊勢ノ宮、宝治元年十首歌合）

伊勢の海（伊勢）　短　清輔△初八（伊勢）

伊勢雄（伊勢）恋　公能
能初八名ナシ
夫（伊勢雄潟、後九条内大臣家歌合為家、イ石見潟）

出雲の宮（出雲）短　宗徳
△（千載一一五九）八（出雲）

石上（大和）秋　親隆
能初八ナシ
夫（大和、新撰六帖為家）
名（大和、万葉一三七三）

井手（山城）春　崇徳
八（山城、井手ノ玉水）
名（山城、万葉二七二一）

春　公能
春　顕輔
春　季通
春　兵衛

●引佐細江（遠江）恋　清輔
（千載八五八）八（遠江）
夫（遠江又尾張、万葉三四二九）
名（遠江、久安百首清輔）

猪名の笹原（摂津）秋　実清
名（摂津、後拾遺七〇九大弐三位）
八（摂津、猪名野）
夫（建保三年名所百首題猪名野、公衡詞）

石垣沼（上野）恋　顕広
（千載九三八）能初名ナシ
夫（国名欠、正治百首式子内親王、但萱斎院御集二七二「いはがき浪」）
八（万葉二七〇七、只非名所も詠之）

石清水（山城）慶　教長
能（山城）
八（山城、男山八幡御在所也）

神　季通
神　親隆
神　堀河
神　小大進

岩代の松（紀伊）冬　顕輔
初（紀伊）
夫（国名不注、万葉一四六人丸）
八名（紀伊、岩代野・岩代杜）

岩代の結松（紀伊）恋　顕輔
能（大和・摂津）
初（山城）
八（大和、摂津、信乃にもいはせの杜はありと云々）

宕瀬の杜（大和）夏　隆季
夫（大和、建保三年名所百首）
名（大和、万葉一四一九）

恋　顕広

いわでの山（陸奥）恋　顕輔
（千載六五〇）八（未勘）
夫（陸奥、知家集）
名（陸奥、久安百首顕輔）

磐余野（大和）秋　兵衛
八（大和）
夫（大和、安嘉門院四条）
名（大和、後拾選三〇五素意）

秋　安芸

浮田の杜（山城）恋　顕広
八（山城）
夫（山城、万葉二八三九）
名（山城、同／金葉七一二為真）

宇治川（山城）冬　安芸
能初八（山城）

絵島が崎（淡路）秋　親隆
△（千載九八六）八（淡路）
名（淡路、久安百首親隆）

絵島の松（淡路）旅　公能
能初八名ナシ
夫（巻二・霞、読人不知詞）

老蘇の杜（近江）短　堀河
△（千載一一六〇）能初八（近江）

逢坂　（近江）　秋　野顕　能初八（近江）
　　恋　顕輔
　　旅　隆季△
　　旅　親隆
　　秋　小大進△

逢坂の関（近江）　恋　隆季　能初八（近江）
　　秋　堀河
　　旅　清輔
　　春　小大進

大井川　（近江）　秋　崇徳　能（山城、若狭）
　　物　公能　初八（山城）
　　夏　季通△
　　短　小大進△

大伴の松（摂津）　旅　隆季△能初八名ナシ
　　夫（巻二五浜、久安百首隆季詞）
　　八（摂津、大伴ノ御津）

大原　（山城）　冬　季通△八（山城）
　　初（山城、大原里）

小倉山　（山城）　秋　公能　能（山城、紀伊）
　　秋　教長　初八（山城）

雄嶋が磯（陸奥）　春　親隆　八（伊勢、陸奥歟）
　　夫（陸奥、千五百番歌合家長）
　　名（丹後、小島磯陸奥有同名）

音無川　（紀伊）　冬　季通　能（豊前）
　　初八（紀伊）
　　名（紀伊、拾遺七五〇元輔）

音羽川　（山城）　短　実清△初八（山城）
　　名（近江）

音羽の里（山城）　夏　公能　能初八夫ナシ
　　名（近江、続古今一六一八実雄）

音羽山　（山城）　春　清輔　能初八（山城）

小野　（山城）　冬　親隆　名（山城、堀河院御時百首師頼）
　　冬　小大進　初八（山城、小野山）

小野山　（山城）　冬　顕広
　　冬　清輔
　　冬　兵衛
　　冬　安芸

姨捨山　（信濃）　旅　季通△（千載五一一）能初八（信濃）
　　短　安芸

思川　（筑前）　恋　安芸　八（筑前）
　　夫（筑前、後鳥羽院下野）
　　名（筑前、後撰五一六伊勢）

鏡山　（近江）　春　公能　能初（近江）
　　春　親隆　八（近江、豊前）
　　（千載一〇五）
　　夫（近江又山城或豊前、万葉三一一按作村主益人〈豊前〉／建保三年名所百首家隆〈近江〉）
　　名（山城、万葉一五五／近江、古今八九九／豊前、万葉三一一）

神楽岡（山城）秋 公能
能初八ナシ
夫（山城、家成Ⅱ五二二）
名（山城、新宮歌合範光）

可古（播磨）旅 実清
△八（播磨、可古島）
名（播磨、万葉二五三人丸）

風越の峯（信濃）冬 清輔
八（信濃）
名（信濃、詞花三八六家経）

春日野（大和）春 教長
能初八（大和）
春 安芸
短 安芸△

春日山（大和）神 公能
初八（大和）
春 親隆
春 顕広
短 顕広

交野（河内）冬 崇徳
秋 兵衛

勝間田の池（大和）夏 兵衛
初（美作）
八（下総、清輔抄在美作云々）
夫（大和、万葉三八三五）
名（美作、万葉三八三五、此池大和国奈良西京薬師寺ノ跡也万葉詞新田部親王遊覧有其便是非美作歟云々）

葛城（大和）春 顕輔
△（千載五六）能（大和、葛城山）
初（大和、葛城神・葛城山）
恋 顕輔△八（大和、葛城山）

葛城山（大和）恋 顕輔
初八（大和）
短 安芸

賀茂の社（山城）夏 顕広
能八（山城）

象潟（出羽）冬 小大進
八（出羽）

木曾（信濃）恋 親隆
△能八（信濃、木曽のかけ橋）
初（信濃、木曽路の橋）
恋 親隆

衣笠岡（山城）秋 安芸
初八（山城）

吉備の中山（備中）夏 親隆
初、八（備中、備後境也）

清滝川（山城）秋 顕広
（千載二八三）初八（山城）

桐原（信濃）秋 顕輔
初（信濃、桐原牧）
秋 隆季
八（信濃、桐原・桐原牧）

朽木の杣（近江）短 清輔
△初八（近江）

久米路の橋（大和）冬 顕輔
△初（大和、葛城橋）
八（大和、久米岩橋）

久米の皿山（美作）冬 実清
初八（美作）

位の山（飛騨）春 崇徳
能（美濃、近江）
初（飛騨）
秋 親隆
八（飛騨、いやたかの岑、六位笏木伐之山也）

鞍馬山（山城）春 崇徳
能初八（山城）

栗栖の小野（山城）秋 親隆
初八（山城）

黒髪山　（大和）　短　実清　△八（下野）
夫（備中又下野、万葉一二四一）
名（大和、万葉一二四一）△
気色の杜（大隅）　秋　堀河　（千載二二七）初八（大隅）
越の高根（越前）　春　親隆　能（越前、越ノ白山）
初（白山、コシノ大山トモ云々）
八（越前、越ノ白根、越ノ高根は其所不定也）
夫（越前、越ノ大山、万葉三一五三）
名（越前、越ノ大山・越ノ白嶺）
●このくれ山（未勘）　旅　小大進　能初夫名ナシ
八（国名不記、清少納言抄）
昆陽　（摂津）　恋　親隆　初八（摂津、昆陽池）
昆陽の池（摂津）　短　公能　△初、八（摂津、猪名野近）
冬　季通
春　清輔
昆陽の篠屋（摂津）　冬　親隆　能初八夫名ナシ、承暦二・四・三〇内裏後番歌合、匡房（先例）
●昆陽の継橋（摂津）　物　教長　△能初八夫名ナシ
衣手の杣（山城）　秋　兵衛　能初八
衣の関　（陸奥）　夏　親隆　能初八
夏　安芸
嵯峨　（山城）　春　顕広　初八（嵯峨野）
嵯峨野　（山城）　短　安芸　△
桜井の里（摂津）　春　顕輔　能（山城、摂津、桜井）初八ナシ
夫（山城或摂津西行Ⅰ九八四）
名（山城、堀河百首顕季、或云三河国名所云々）

桜山　（近江）　冬　兵衛　能初八ナシ
夫（近江、寛治元年大嘗会主基方近江国御屏風、匡房イ）
名（近江、前記大嘗会匡房、丹波国有同名云々とも）
佐保山　（大和）　秋　実清　能初八（大和）
春　小大進
●佐渡の海（佐渡）　慶　季通　能初八夫名ナシ
更科　（信濃）　恋　親隆　△能
更科の山（信濃）　秋　顕広　初（信濃、更科山）、八（信濃）
塩釜の浦（陸奥）　秋　清輔　（千載二八四）能初八（陸奥）
しほの浦（未勘）　春　隆季　能初八名ナシ
夫（未勘国、久安百首隆季）伊勢集Ⅲ四二二・人麿集Ⅲ三六八（万葉未見）
志賀須賀の渡り（三河）　旅　堀河　初八（三河）
飾磨の市（播磨）（椿）　恋　顕広　（千載八五六）八（播磨）
夫（播磨、輔相集二三・重之集一六五）
しきみが原（山城）　短　小大進　△能初八ナシ
夫（山城、好忠集Ⅱ九三）
名（山城、千五百番歌合七九七番右、越前）
賤機山　（駿河）　秋　実清　初八（駿河）
信田の杣（和泉）　慶　顕輔　初八（和泉）
冬　隆季
信夫　（陸奥）　物　親隆　初（陸奥、信夫浦・信夫里）
八（陸奥、信夫原・信夫浦・信夫里）

四極山（豊前）秋　顕広
八（豊前、或しづは山）
夫（近江又豊前、万葉二七二）
名（豊前、万葉二七二）
他に摂津（犬養『万葉の旅』）、三河（代匠記、『大日本地名辞書』）

白川（山城）夏　公能
能初八（山城）

白嶺（甲斐）冬　隆季
能初八（甲斐、甲斐嶺）

菅田の池（大和）恋　安芸
（千載八五七イ）能初八

須磨（摂津）短　安芸
△

須磨（摂津）夏　顕広
（千載一八三）初八（摂津、須磨浦）

須磨の浦（摂津）秋　親隆
△（千載九八六）

須磨の浦（摂津）物　実清
初、八（摂津、こりずまの浦と云は同所也）

須磨の浦（摂津）恋　安芸

隅田川原（武蔵）旅　顕広
八（武蔵、隅田川、下総駿河とも）
夫（同駿河武蔵又大和伊勢、建保三年名所百首、順徳院）
名（武蔵、住田川、古今四一一業平出羽、澄田川、古今六帖三二一三一）

住の江（摂津）短　堀河
△（千載一一六〇）能初八（摂津）

住の江の浦（摂津）秋　親隆
八（摂津、住吉浦）

住吉（摂津）恋　隆季
△能

住吉の岸（摂津）恋　顕広
八（摂津、松原昔あり、御幸所）

住吉の神（摂津）神　教長
初八（摂津、住吉社）
夫（摂津、住吉神、拾玉集一四九四）

諏訪（信濃）冬　親隆
初八（信濃、諏訪海）

諏訪の海（信濃）冬　清輔
初（信濃）八（信濃、諏訪海・水海）

関の清水（近江）旅　隆季
△能（近江）
名（近江、関小川、金葉二六二俊頼）

●芹生の里（山城）冬　季通
△能初八ナシ
夫（山城、林下集三五四他）
名（山城、芹生野、林下集三五四）

袖の浦（出羽）短　堀河
△（千載一一六〇）能初（出羽）
夫（出羽、経信Ⅲ〈大納言経信集〉九二）
名（出羽、拾遺九六一読人不知）

園原（信濃）冬　安芸
能八（信濃）

高砂（播磨）春　教長
能初（播磨）

恋　顕輔
（千載六五一）八（高砂は物て山の名なりとも云へり）
夫（播磨、高砂浜、古来歌合源信／高砂松、最勝四天王院障子歌・定家〈拾遺愚草一九三七〉）
名（播磨、高砂浦、高砂松、古今九〇九興風）

高師の浜（和泉）旅　隆季
△初（和泉）
八（摂津、通和泉）
夫（和泉又伊賀、万葉六六）
名（和泉、古今九一五貫之）

高師の山（遠江）夏　教長
能初八ナシ
夫（遠江、拾玉集三七六九）
名（遠江、古今六帖三一七三七）

高瀬の淀（河内）夏　堀河
能初八ナシ
夫（国名不註、続後撰六九一家長）
名（河内、催馬楽、蔦枕／六百番歌合・鴫、顕昭）

●高浜（山城）慶　隆季
能初八夫ナシ
名（山城、続後撰一三三六後嵯峨院）

高円の山（大和）秋　教長
八（大和）

高天(間)の山（大和）　秋　崇徳　能初八（大和）
春　教長
春　顕輔△（千載五六）
春　実清
武隈の松（陸奥）　旅　季通　能八（陸奥、武隈）
初（陸奥、武隈松）
田子の浦（陸河）　春　崇徳　能初八（駿河）
糺の杜（山城）　夏　清輔　八（山城）
立野（武蔵）　秋　親隆　八（武蔵）
名（武蔵、後撰三六七忠房）
立田川（大和）　秋　顕広　能初八（大和）
立田山（大和）　秋　清輔　（千載三六六）能初八
玉江の沼（摂津）　春　清輔　（千載三五）八（摂津）
夫（越中、長暦一品宮歌合相模、イ元輔）
名（摂津、久安百首、清輔）
玉川（陸奥）　冬　崇徳　（千載四四二）初（摂津）
八（武蔵、陸奥、摂津、卯花咲けるは摂津か〈三島玉川〉、後拾遺一七五相模）
名（山城、井手玉川／新古今一五九俊成／武蔵、調布玉川、万葉三三七三／近江、野路玉川、千載一三一四俊頼／陸奥、野田玉川、新勅撰一三一四読人不知）
玉川の里（陸奥）　冬　顕広　（千載四四三）
能初八名ナシ
夫（陸奥、久安百首親隆）
つがろの野（陸奥）　秋　親隆　能八（常陸、筑波嶺）
筑波山（常陸）　秋　清輔　初（常陸、筑波山）
八（相模、筑波山つくばねとも云）

津田の細江（播磨）　短　隆季△　八
夫（播磨、万葉九四五）
名（播磨、万葉九四五・続古今九三七赤人）
円江（摂津）　秋　隆季　能初八ナシ
夫（国名不註、久安百首隆季）
名（摂津、建久六・一・二〇民部卿家歌合深雪七番右、顕昭／万葉三五赤人、縄之浦同所）
八（摂津、津守浦）
津守（摂津）　恋　隆季　能八（山城）
常盤の山（山城）　恋　清輔　夫（山城又常陸、入道右大臣集六二）
名（山城、古今一四八読人不知／丹波、江帥集三三五）
十綱の橋（陸奥）　恋　親隆　（千載七一五）初八（陸奥）
名（陸奥、久安百首親隆）
戸無瀬（山城）　秋　季通　八（山城）
名（山城、金葉二七三公実）
秋　親隆　（千載三四四）
戸無瀬川（山城）　冬　安芸　能初八ナシ
夫（巻一七千鳥、千五百番歌合六三五番後鳥羽院判御歌詞）
名（山城、新勅撰八一一俊成）
飛火野（大和）　春　教長△　初（大和）
八（大和、飛火の野べ春日野也）
長居の浦（摂津）　離　崇徳　初八（摂津）
夫（摂津、堀河御時百首国信）
名（摂津、千載四二七静賢）
長坂（山城）　春　安芸　能初八ナシ
夫（山城或丹波、堀河御時百首国信）
名（山城、同）

長浜（伊勢）短 小大進 △能八（伊勢）
夫（備前又近江伊勢越後、喜多院入道二品親王家五十首、顕昭）
名（伊勢、古今一〇八五／遠江、万葉一六一五）

ながらの関（摂津近江）短 安芸 △能初八夫名ナシ
能初八（摂津、長柄橋）
初八（近江、長等山）
名（摂津、長柄／近江、長等山）

名草の浜（紀伊）短 堀河 （千載一一六〇）能初八（紀伊）

なこその関（陸奥）短 安芸 △能（遠江）
初八（陸奥）

なごの入江（越中）冬 実清 初（摂津、名児海）
八（越中、奈呉海、奈呉江）
夫（越中又越前、奈呉江、宝治二年百首、基良）
名（越中、奈呉江、万葉四〇一八家持）

七栗のいでゆ（信濃）短 季通 △初八（信濃）

難波（摂津）春 季通 （千載一〇六）能（摂津、難波津）
初（摂津、―江潟）
短 実清 △八（摂津、―海、江、浦、当、津）
短 顕広 △

難波江（摂津）冬 教長
物 教長

難波潟（摂津）冬（芦鴨）顕輔 （千載四三三）
冬（千鳥）顕輔

難波の浦（摂津）短 崇徳 △（千載一一五九）

短 隆季 △
八（尾張）
名（尾張、堀河院御時百首、仲実）

鳴海潟（尾張）恋 公能 （千載八五四）八（近江、にほの水海）
名（近江、久安百首兵衛、新古今三八九家隆）

鳰の海（近江）恋 兵衛

●野鳥が崎（安房）旅 顕輔 （千載一一六三）初（出羽、野島）
八（近江、野島陸奥にものじまは有也／近江、野島が崎東路とも云也、一説有淡路と云々）
夫（淡路或越中、万葉二五〇・二五一人丸）
名（安房、久安百首、顕輔／淡路、人丸）
能初八夫名ナシ（和泉式部集はこがたの池、未勘）

●はこやだの池（未勘）冬 安芸 初（大和）
八（近江）
名（近江、拾遺一一〇八元輔）

走井（近江）旅 清輔 （千載一一五九）能（摂津）
八（山城）

はづかしの杜（山城）短△崇徳
短 公能 △夫（山城、羽束之、千五百番歌合三七五番左、顕昭）
名（山城、羽束志、後撰六六五読人不知）

はばかりの関（陸奥）短 実清 △八（陸奥）
夫（陸奥、嘉応二・一〇法性寺歌合、公通）
名（陸奥、後拾遺六九四読人不知）

播磨潟（播磨）秋 親隆 △（千載九八六）八（播磨）
旅 実清

桧原（大和）秋 実清 △八（大和、巻向檜原）
名（大和、檜原、続古今一四九六人丸）

桧原の山（大和）　短　顕輔　△能初八ナシ
夫（檜原山、名所不審）
名（大和、檜原山、万葉一〇九二人丸）

氷室山（山城）　夏　公能　（千載二〇八）能初八ナシ
夫（巻九氷室、名所不審カ）
名（山城、氷室山、久安百首公能）

比良の高根（近江）　冬　教長　能初（近江、比良山）
八（近江、比良高根・比良山）

広沢の池（山城）　春　小大進　能（播磨）
初（山城）
八（山城、在嵯峨）

深草の里（山城）　秋　顕広　（千載二五八）能初（山城、深草山）
八（山城、深草里・深草山）

吹飯の浦（和泉）　物　隆季　初（和泉）
八（伊勢）
夫（紀伊又和泉、久安百首隆季）

富士の高根（駿河）　冬　顕広　名（和泉、新古今一七二一清正）

藤生野の神（山城）　秋　公能　（千載二八二）能初（駿河、富士山）
八（駿河、富士高根・富士山）

伏見の里（山城大和）　神　安芸　能初八ナシ
夫（山城、催馬楽・藤生野）
名（山城、催馬楽、千五百番歌合二七四番左、公継）

二見の浦（伊勢播磨）　秋　公能　能初八（山城）
但、八（大和、菅原伏見里）
初八（伊勢、播磨）

ふるから小野（大和）　秋　親隆　八（大和）
名（大和、古今八八六読人不知）

布留の社（大和）　短　堀河　△（千載一一六〇）能初八（大和）

堀川（山城）　神　兵衛
夏　安芸
短　崇徳　△（千載一一五九）初八（山城）
名（山城、詞花三八三好忠）

巻向（大和）　短　顕輔　△八（大和、巻向檜原、巻向山）
冬　季通△
冬　実清

待兼山（摂津）　秋　実清　能初八（摂津）

松島（陸奥）　春　親隆　△能初（陸奥）
春　兵衛　八（陸奥、伊勢）

待乳山（大和）　旅　安芸　能初（大和）
八（駿河、大和）
夫（大和又駿河、新勅撰五〇一弁基）
名（大和、万葉五五／紀伊、万葉一六八〇）

松の尾（山城）　神　安芸　△八（山城、松尾宮・松尾山）
夫（山城、郁芳門院安芸）
名（山城、後拾遺一一七〇兼澄）

松浦の山（肥前）　恋　崇徳　八（肥前）
夫（備中又肥前、最勝四天王院名所障子・具親）
恋　教長　名（肥前、万葉八七一）

真野の池（摂津）　冬　実清　八（摂津）
名（摂津、万葉八七一）

●真野の糸萩（大和）　秋　安芸　八（大和、真野萩原）夫（大和、同、永久百首俊頼）
真野の小菅（陸奥）　恋　俊成
真野の萱原（陸奥）　秋　教長　八（陸奥）夫名（陸奥、万葉三九六笠女郎）
真野の萩原（大和）　秋　隆季
御垣が原（大和）　春　顕広　八（大和）夫（大和、中務Ⅰ〈中つかさ〉七七）名（大和、詞花三兼盛）
三笠の山（大和）　神　清輔　能初八（大和）
夏　安芸
●水茎の浦（未勘）　恋　隆季　能初八夫名ナシ
三室の岸（大和）（千載一一二八）無常　小大進　能八（大和）名（大和、拾遺三八九草春）
三室の山（大和）　春　清輔（千載五八）初八（大和）
御裳濯川（伊勢）　神　公能　初八（伊勢）
宮城野（陸奥）　秋　堀河　初八（陸奥）
み吉野（大和）　短　教長△初八（大和）
春　親隆
冬　実清
春　顕広△
三輪の社（大和）　神　顕広　初八（大和）
三輪の山（大和）　春　公能　初八（大和）
春　堀河
春　安芸
三輪の山本（大和）　春　兵衛
武蔵野（武蔵）　旅　隆季　能初八（武蔵）
秋　親隆
室の八嶋（下野）　春　清輔　初（下総）八（下野）名（下野、詞花一八八実方）
最上川（出羽）　恋　小大進　初八（出羽）
守山（近江）　冬　顕輔　能（遠江、近江）初（近江）八（近江、遠江、又在上野歟）夫（近江、玉吟集一二六八）名（近江、古今二六〇貫之）
八入の岡（山城）　秋　親陸　能初八ナシ夫（国名不註）名（山城或云大和国泊瀬山麓也云々、堀河御時百首仲実）
●矢矧川（三河）　春　親隆　能（三河）夫（三河、久安百首親隆）名（三河、矢矧并豊川、家良Ⅱ五五九）
山の井（山城）　秋　親隆　初八（山城）夫（近江又山城、石井、千五百番歌合二八七番左良経）名ナシ
杜ゆるぎの（近江）　秋　崇徳　能初八（近江）

春　小大進

横野（上野）　春　顕広　八（上野）夫（近江又上野河内、西行Ⅰ一〇一五）名（上野、久安百首顕広／武蔵、玉吟集一六五七）

与謝の海（丹後）　恋　親隆　初八（丹後）

吉野川（大和）　春　安芸　能初八（大和）

吉野の里（大和）　春　堀河　（千載三）八（大和）

吉野山（大和）　春　季通　（千載八〇）能初八（大和）

冬　顕広

淀（山城）　夏　親隆　八（山城）名（山城、古今七五九読人不知）

夏　小大進

和歌の浦（紀伊）　短　公能　△能初八（紀伊、和歌浦）

短　顕広△

和歌の浦（紀伊）　短　実清△

三

名所一覧にあげた名所数は二三〇である。これを次に二、三の表に分類してみたい。詠進者の歌数では、親隆37・安芸26・顕広25・公能24・顕輔22・清輔19・隆季17・季通16・実清15・小大進15・崇徳14・堀川12・教長11・兵衛10の順になる。親隆が顕著である。使用名所数は必ずしもこの順序とならないが、以下のとおりである。

A　国別歌題別名所数

国	春	夏	秋	冬	恋	神祇	慶賀	釈教	無常	離別	羇旅	物名	短歌
山城	11	8	15	11	2	6	2					1	9
大和	22	6	16	8	4	4			1		2		10
河内		1	1	1									
摂津	5	2	4	5	8	2				1	2	3	6
伊勢					1	1							
尾張					1								
三河	1										1		
遠江		1			1								
駿河	1		2										
安房											1		
武蔵		2									2		
常陸		1											
近江	4		4	3	3						5		2
飛騨	1		1										
信濃			3	4	3						2		
甲斐				1									
上野					1								
下野	1												
陸奥	3	3	8	2	3						1		3
越前	1			1	1								

| | | |

この表でわかるように、いずれの詠進者の場合も使用名所の過半を優位八ヶ国に求めている。ことに大和・山城、ついで摂津が顕著である。名所への意欲が高い場合ほど、これ以外の諸国への関心が払われているようで、親隆・安芸・公能がその例である。親隆は初出例も多く、もっとも積極的であったようである。一方、逆にこの八ヶ国でほとんどの名所が占められている場合もある。教長・小大進・実清・兵衛である。

次に詠進者と歌題との関係で、名所の使用状況をみてみたい。

C　歌題別作者別名所数

	春	夏	秋	冬	恋	神祇	慶賀	釈教	無常	離別	羇旅	物名	短歌
崇徳	5	4	2	2						1			4
公能	6	3	7	1	2	2					1	1	3
教長	3		1	3	2	1	1					2	1
顕輔	5	1	3	5	7	1					1		2
季通	3	2	1	5		2	1				1		4
隆季	1	2	3	2	4			1			5	1	2
親隆	7	5	15	5	5	1					2	1	
実清	2		5	7							2	1	5
顕広	5	2	3	5	6	2					3		4
清輔	5	1	5	3	3	1					2		2
堀河	3	1	3	1	1	1							5
安芸	5	5	5	6	4	3					1		2
近衛	2	1	2	3	1	1							
小大進	2	1	2	2	1	1							
小計	(54)	(24)	(59)	(30)	(37)	(15)	(4)	(1)	(1)	(19)	(36)		

名所の使用は、一般的にいえば四季歌、あるいは羇旅歌がもっとも適した分野である。叙景的なものへの関心と技法とが想定され、名所に期待される効果がすくなくないからである。この表によっても、その名所の概念は事実として示されているようである。歌数の点からみて、ことに冬歌に名所使用が著しく、ついで秋歌・羇旅・春歌となっている。短歌の場合は別格で、恋歌の場合と同様に名所の修辞的効用が求められているといっていい。実際にその例はすくなくないのである。詠進者によってかなりの相異のあることも確かであるが、冬歌・秋歌への関心はやはり時代的な好尚がもとになっていると思われる。

そこで次に歌題ごとに、名所の主なものをあげてみると以下のようになる。

春

朝倉　朝原　飛鳥川　嵐山　井手　鏡山　春日野　春日山　葛城　位山　昆陽　桜井里　佐保山　高砂　高間山　田子浦　長坂　飛火野

夏

広沢池　み吉野　三輪山　矢矧川　横野　吉野川　吉野里　吉野山　安積沼　朝倉　あまのかご山　大井川　音羽里　勝間田池　吉備中山　昆陽池　白川　須磨　高瀬淀　糺杜　氷室山　布留社　三笠山　淀

秋

明石　化野　嵐山　生野　生駒山　猪名笹原　盤余野　逢坂　逢坂関
大井川　小倉山　神楽岡　交野　衣笠岡　清滝川　桐原　位山　気色
杜　衣手杜　佐保山　賤機山　高円山　高間山　立野　立田川　立田
山　津軽野　戸無瀬　深草里　伏見里　二見浦　ふるから小野　待兼
山　真野萱原　真野萩原　八入岡

冬

青根峯　朝日山　穴師川　穴師山　有乳山　猪名笹原　宇治川　大原
音無川　小野　小野山　風越峯　高野　象潟　久米路橋　昆陽池　信
太杜　白嶺　諏訪　芹生里　玉川　戸無瀬川　奈呉入江　比良高嶺
吹飯浦　巻向　み吉野　吉野山

恋

阿武隈川　有馬出湯　有間山　伊勢雄　岩代松　浮田杜　逢坂　逢坂
関　思川　葛城山　飾磨市　菅田池　須磨浦　住吉　高砂　十綱橋
鳴海潟　鳴海　松浦山　水茎浦　最上川　与謝海

旅

明石　芦屋沖　生野　絵島　逢坂　逢坂関　大伴松　志賀須賀渡　姨
捨山　このくれ山　隅田川原　関清水　高師浜　野島埼　武隈松　武
蔵野

神祇

石清水　春日山　賀茂社　住吉神　藤生野神　布留社　松尾　三笠山
御裳濯川

短歌

伊勢海　出雲宮　老蘇杜　大井川　春日野　春日山　朽木杣　黒髪山
昆陽池　檪原　住江　津田細江　長浜　名草浜　七栗湯　難波　難波
浦　羽束師杜　はばかりの関　桧原山　布留社　堀川　巻向　吉野山
和歌浦

列挙してみると、それぞれにやはり先故の歌があり、その景物景趣の連想から、歌題との関連が自然に想像されるものがきわめて多い。伝統的な歌の世界の特質がよく示されている。ことに傍線をつけた名所は、歴史的な由縁の濃いものである。

しかし、仔細にみれば名所の選択と使用は、各人各様である。次に具体的にあげてみたい。名所の用法は大別して、修辞的技法に属する面と、本来の地名の映像に期待する面とがある。

まず修辞的技法に組みこまれた場合である。これには序・懸詞・縁語の表現との関連がある。

序

いかにせむ阿波の鳴戸に引く潮のひき入りぬべき恋の病ひを（顕輔）

高砂の尾上の松に吹く風の音にのみやはきき渡るらむ（教長）

陸奥の十綱の橋にくる綱のたえずも人にいひ渡るかな（親隆）

これらは名所の恋というべき常套の用法である。名所を基本とする歌句が序を構成している。このほか名所が直接序となっている例もある。

難波の浦の名にかけて（隆季）

音羽川音ばかりには（実清）

さすがに短歌（長歌）の場合には、この用法が多い。

懸詞

これにも二種類あって、①直接名所が懸詞の役割を果している場合と、②名所による懸詞的連想が作意となっている場合とがある。

①沖つ波立ち別るとも音に聞く長居の浦に船止めすな（離別　崇徳院）

秋の来る気色の杜の下風に立ちそふものはあはれなりけり（秋　堀河）

さらでだに色めきたりと磐余野に風におきふす女郎花かな（秋　安芸）

とくに註解を加えるまでもなく、自明な用法で、これらの歌は四季歌を中心に各歌題にみられるものである。

②鞍馬山木の下蔭の岩つつじただこれのみや光なるらむ（春　崇徳院）

鏡山すがたも見えず春霞八重たなびけるけさのけしきに（春　公能）

みさぶらひみかさな召しそ浅香山木の下露も今はひぬらむ（羇旅　季通）

散らば散れ岩瀬の杜の木枯につたへやせまし思ふ言の葉（恋　俊成）

これらは名所による懸詞的連想が、傍点部の表現にかかわっている。

①の方が②よりも例は多いが、この懸詞的連想は名所の活用の点で注意されるものである。

縁語

名所が直接縁語になるということでは、勿論ない。名所を懸詞的な連想によって置きかえ、それを縁装表現の核としている場合である。

時鳥衣の関にたづねきてきかぬうらみをかさねつるかな（夏　親隆）

きてみれば衣笠岡に立つ鹿は夜をかさねても恋ふるつまかな（秋　安芸）

「衣の関」の衣、「衣笠岡」の衣を中心に、各歌イロハニの縁語関係ができている。この縁装が可能な名所はかなり限られていて、数の上では多くない。

このような修辞的な用例を作者別に表示すると、次の結果になる。

	序	懸詞	縁語
崇徳	1	9	
公能	1	11	
教長		5	
顕輔		7	
季通		7	
隆季	2	4	
親隆	2	6	2
実清	1	4	
顕広		6	
清輔	1	4	
堀河	2	5	
兵衛		3	

安芸		15	2
小大進	1	4	

この表で序一一、懸詞九〇、縁語四という数字になり、やはり懸詞がもっとも多い。名所が地名の表出でありながら基本的には歌詞であって、その文学的語彙である一面が明らかに出ている。それが修辞上の技巧を誘っているのである。

次に地名であることに重心を置く用法は、名所と景物景趣との関連が注意されるところである。久安百首の名所例の中で、その関係の定着がもっとも顕著にみえるのは、井手・三輪・小野の場合である。

隙もなく井手の河波折りかけてそこまで匂ふ山吹の花（春　顕輔）

山吹の花をあまたにかへしみむしばしな立ちそ井手の河波（春　季通）

三輪の山花のさかりを尋ねつつとふ人しげき杉立てる門（春　堀河）

杉立てる門をもいかが尋ぬべき霞みこめたる三輪の山本（春　兵衛）

爪木とる跡絶えにけり降る雪にいかにかすべき小野の炭がま（冬　親隆）

小野山や焼く炭がまにこり埋む爪木とともに積る年かな（冬　顕広）

炭がまの芹生の里の煙をばまだき霞の立つかとぞ見る（冬　季通）

井手は山吹、三輪は杉、小野は炭がまということで貫かれている。芹生は初出の名所であるが、小野との地縁でみいだされたものである。このように名所は、地名としてその地に由縁をもつ景物景趣を一首に配することで、ある具象的な想像を促す利点がある。修辞的な起用によっても、ある程度新しさ珍しさをみいだされたのは事実である。しかし、周知共有の、多分に観念化されてはいるが、その地名を効果的に組みこむことで跼蹐されがちな歌の自然風土に変化と光彩とがもたらされた。それが、名所の正統的な用法である。この百首の場合、さきの作者別の修辞起用の表示からすれば、正統的な作例は親隆・清輔・顕広・教長・堀河・顕輔・隆季・季通・公能といった順になろうか。

み狩する交野の御野にふる霰あなかまだき鳥もこそ立て（崇徳院）

船とめてみれば絵島の松が枝にしろきを後にかくる白波（公能）

若菜つむ袖とぞ見ゆる春日野の飛火の野べの雪のむら消え（教長）

葛城や高間の山の桜花雲井のよそにみてや過ぎなむ（顕輔）

年ふとも猶岩代の結び松とけぬものゆゑ人もこそ知れ（同）

吉野山花はなかばに散りにけりたえだえかかる峯の白雲（季通）

播磨潟須磨の月よめ空さえて絵島が埼に雪降りにけり（親隆）

駒なづみ岩間片岨たどりゆく木曾のかけ路はつららしにけり（同）

飛鳥川浪の花こそ咲きにけり高間の山に桜散るらし（実清）

夕されば野べの秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里（顕広）

石はしる水の白珠かずみえて清滝川にすめる月影（同）

朝霞深くみゆるや煙立つ室の八嶋の渡りなるらむ（清輔）

塩釜の浦吹く風に霧はれて八十島かけてすめる月影（同）

雪深き岩のかげ道跡たゆる吉野の里も春は来にけり（同）

逢坂の関の杉原露こめてたちどもみえぬ夕かげの駒（堀河）

水上に桜散るらし吉野川岩こす波の花とみえつつ（安芸）

象潟や柴のとぼその明け方に声うらがれて千鳥鳴くなり（小大進）

顕広「深草の里」は千載入集、自讃歌としてもっとも知られている。千載に入った歌は、顕輔「高間の山」季通「吉野山」親隆「播磨潟」顕広「清滝川」清輔「塩釜の浦」堀河「吉野山」である。崇徳院「交野」教長「春日野」清輔「室の八嶋」は、新古今に入っている。さすがに撰集に入った歌は、名所を一首の叙景に生かして、季趣を深めているといえる。名所の歌で千載への入集は全部で三三首である。撰進資料としてこの百首から一二六首が入集しているので、二六％にあたる。撰集類より三％ほど高率である。因みに作者一四名の千載入集全歌数は一七四首なので、七二％もこの百首から採っていることになる。撰者俊成にとって、登竜門となった感銘のほどが思われるのである。

さて百首全般では、まだ技法的に叙景を客観化するに至らない場合が目につくが、右の歌ではかなり視覚化された景の構成となっている。修辞上の趣向的な興味よりは、はるかに名所にふさわしい景趣の発掘が意図されているようである。それは実清「飛鳥川」が従来の渕瀬常なき観念を離れ、顕輔「岩代の結び松」に有間皇子の悲劇が霧消していることにもあらわれている。名所の歌についての思考や技法が、故事古歌を視野に置きながらも、一面、叙景的な意図と方向とに新生面を求めていたことがわかる。

それはまた、名所一覧には除いたが、次のような場合にもみることができる。

春風に志賀の山越え花見れば峯にぞ浦の波は立ちける（親隆）

浦づたふ磯の苫屋のかぢまくらききもならはぬ波の音かな（顕広）

道すがら心も空に詠めやる都の山は雲がくれぬる（堀河）

ことに親隆は、「志賀の山越」の題材を春景に定着した点で画期的な一首となった(7)。名所の歌と同等の評価を受けてよい例である。

こうしてみると久安百首の名所は、ある水準を示したものといえる。堀河百首に較べて名所の多彩さでたしかに遜色をまぬがれないが、それは歌題の設定が大きく響いているように思われる。駒迎・関・河・橋・炭がま・海路・野・山・紅葉・鷹狩などと列べてみると、名所の連想に結びつくのは自然であった。その点、久安百首は特別な配慮は何もない。ただ詠進者は先蹤の百首をかなり意識していた様子で、共通の名所がすくなくない。著名な名所が共通するのはいうまでもないことで、この時点では比較的歌例のすくないものが出ている。たとえば、次の名所である。

青根峯　朝倉　阿太大野　嵐山　引佐細江　岩垣沼　浮田杜（大荒堀木杜）　思川（逢初堀川）　象潟　衣笠岡　清滝川　桐原　昆陽池

桜井里　戸無瀬　長坂　松尾　室八嶋　八入岡

この中でとくに傍線をつけたのは、平安京内外の身近な生活圏に属するものである。堀河百首の名所の関心を示した一面で、久安百首でも意識されたようである。ほかに同類は、石清水・宇治川・大井川・大原・小倉山・小野・神楽岡・賀茂社・嵯峨・藤生野神・伏見・堀川などをあげることができる。名所が観念的な表現媒体にとどまることなく、本来地名のもつ実在的なものへの省慮が働いたかにみえる。久安百首におけ

る名所の意識は、ある意味でこの点にかかっていたといえるのである。

堀河百首が名所を想定されるような歌題を多く用意したのに較べると、久安百首は名所使用の便宜について、まず発想上・作意上に制約されるものがあったと思われる。名所の多彩な詠出という点で事実遜色をまぬがれがたいが、著実に名所の実績を重ねたことは認めていいようである。名所表現の効果はわずかながらあげた先の歌例によっても知ることができる。詩作の次元による名所への関心と技法とは、次第に未来への可能性を具体化する段階をみせようとしていたのである。個々の歌をとおして実際に触れるべき問題はすくなくないが、紙幅の余裕もないので別の機会を待つことにしたい。

（1）井上宗雄氏「詞花集をめぐる歌壇」（平安朝文学研究5、昭三五・四）

（2）谷山茂氏「久安百首部類本と千載集」（国語国文昭三五・七）

（3）谷山茂氏「俊成部類久安百首和歌集」（人文研究昭四一・二、昭四二・一）

（4）久保田淳氏『久安百首』における藤原俊成」（国語と国文学、昭四四・四）

（5）松野陽一氏「久安百首」（『藤原俊成の研究』所収、昭四八・三）

（6）拙稿「堀河百首名所考」（跡見学園短期大学紀要第一三集、昭五二・三）

（7）拙稿『志賀の山越』小考」（跡見学園語科紀要21、昭四八・三）